



二学期終業式を迎えました

終業式や修了式では、必ず学期初めや年度初めに話をしたことの振り返りを子どもたちに考えてもらうようにしています。それは、最初に話したことが『めあて』なら振り返りは『まとめ』だからです。

授業でも『めあて』と『まとめ』が必要です。そうしないと、何を学ばばいいのか、何が達成できればいいのかがわからず、何がわかったのか、何が課題となって残ったのかが自分自身で確認できなくなります。

二学期始業式で、私は子どもたちに次の4つの『めあて』を投げかけました。

- ①経験値を上げて、自分をレベルアップさせること
- ②「こ・な・が・い」の充実と徹底
- ③粘り強くあきらめないこと
- ④礼儀正しくすること

①では、どの行事や学習の機会を通じてどんな成長ができたかを振り返ると、自分にどのような力がついてきたのかがわかります。ただ「楽しかった」「またしたい」という感想だけでは不十分です。

②の「ことば」「なかま」「がんばり」「いきいき」は、小長井小の具体的な子どもの姿です。「言葉づかい」「仲間への接し方」「くじけないがんばり」「心身ともにいきいきとした学び」は自分の成長をはかる物差しです。

③はキャリアパスポートで自分の目標に対する取り組み具合が振り返ることができません。

④は個人差が大きいことが課題かなと思います。社会生活における礼儀は必須であり、いきなり身につくものではありません。

冬休みが終わると、進学・進級まで実質50日余りです。新年を迎えるにあたって、どんな進学・進級にしていきたいかを見通す機会としてもいいのかなと思っています。

みなさま、よいお年をお迎えください

あおなみ-Blue Wave-

学校ホームページはこちらから→



三学期・新年にあたって

あけましておめでとうございます。

2026年(令和8年)を迎え、今年が始まりましたが、学校的には3学期の始まりとともに令和7年度の締めくくりに向かう時期でもあります。ですので、始まりと終わりが混在した感覚になる時期でもあります。お子様や皆様の年明けはどのようなものだったでしょうか。

さて、3学期の始業式では各学年の3学期の目標として、次のようなを子どもたちに話しました。

- 1年生…4月、新1年生に学校のことを教えてあげられる準備ができること
- 2年生…3年生からの理科・社会・総合・外国語活動の学習に備え、2年生の学習をしっかり振り返っておくこと
- 3年生…3月で小学校生活の半分が終わることをふまえ、学級や学校全体のことを考えられることが必要なこと
- 4年生…学校のリーダーとしての5年生になれるよう自分の役割に責任をもてるよう過ごすこと
- 5年生…4月の始業式から6年生として力を発揮してくれることを期待しているので、そのためにどのような準備すればいいか考えること。
- 6年生…卒業式は小学校生活の集大成。1年生からの学びが卒業式に表れること。同時に中学校進学という大きな節目を迎える心構えをすること

また、個々の3学期の目標もあるかと思います。一人一人の子どもたちが自分の目標をもって少しずつでも達成できるようにしていきたいと思います。

「夢なき者に理想なし 理想なき者に計画なし 計画なき者に実行なし
実行なき者に成功なし ゆえに夢なき者に成功なし」(夢や目標がなければ、人は成功を収めることはできない) ー吉田松陰の言葉よりー



生き抜く力

草食動物の多くは、誕生したら間をおかず、自分の脚で立ち上がります。それは、立ち上がらないと命に係わるからです。

また、肉食動物はある程度成長したら、成獣が幼獣に狩りの仕方を教える種もいます。

どちらも厳しい野生を生き抜くために必要なこととして本能的に行っているのだと思います。そしていつまでも大人が子どもの面倒を見ることはありません。それは先に生を受けた者から順に寿命が尽きる摂理を知っているかのようでもあります。

人と野生生物を同列に語ることはできませんが、時々野生生物の方が人より子どもに対して「生き抜く力」を育てているように思える時もあります。

では、人にとっての「生き抜く力」とは何でしょうか。野生生物のように誕生してすぐ立つとか狩りをする事とは当然違います。それは次のようなことではないでしょうか。

- ・ 困難なことに出会ってもそれを乗り越える思考力や精神力
- ・ 自分も他人も心地よく生活できるようにする調整力
- ・ よりよい生活を多くの人と紡ぎだせる創造力
- ・ 社会のルールやマナーを守る道徳性や公共性 などがあげられます。

子どもを愛おしく思い、慈しむのは人として当然の心情です。しかし、と同時に子どもが変化の激しい社会をたくましく生き抜き、社会の一員として協同して充実した社会をつくれるようにしておくのも大人の大事な役割の一つと思えます。

あおなみ-Blue Wave-

学校ホームページはこちらから→



大きくなったら・・・

私の娘たちが小学校に入る前の話です。「大きくなったら何になりたい？」と聞いたら、「リンゴ！」と答えました。そこで「人にしようか？」と聞くと、「おばさん！」という返事が返ってきて「・・・」となったことを今でも覚えています。

小学校の入学は私の転勤の関係で、離島の学校でした。そこで、娘たちが言っていたのは「警察官になりたい」「お医者さんになって島のおじいちゃん、おばあちゃんの役に立ちたい」というようなことでした。なんと志の高いことを言うんだらうと親として感心しました。

そして、現在上の子は、大学で経済学を中心に学びながら、アルバイトにも精を出しているようです。幼いころからお絵描きが好きだった下の子は、この春から専門学校でアニメーターの技術を学びに家を出ます。

この先も我が子がどのような道を歩んでいくのか分かりませんが、自分が選んだ道に悔いなく精一杯向き合ってくれればと思っています。

子どもが目指すことは成長とともに変わることもあれば、幼いころから追い続けたことを成就させることもあるでしょう。

しかし、子どもの成長の一瞬一瞬が、その子の未来の糧となって、将来的な今を形作れるようにしてあげるのも大人の役割の一つかなと思っています。

余談ですが、上の子が高校生の時、「教員はどうか」と尋ねたら、「それは、ない」と食い気味に即答されたことも覚えています。(💧)



仲良きことは…

「仲良きことは美しきかな」、文豪 武者小路実篤の言葉です。家族や親子、職場、友達等々、仲がいいことを否定する要素はありません。

では、「仲がいい」とはどんなことなのでしょう。

いつも一緒にいること、一緒に遊んでいること、もののやり取りをしていること、気軽に話せること…というようなことなのでしょう。

私が学級担任時代に学校でのクラブや委員会を選ぶ時のポイントとして「友達関係で選ばない」と言っていました。それは、いくら普段一緒にいるような友達でも「自分がしたいことは違う」からです。また、一人で、人前で発表したり発言したりする機会をクラスの子全員に年1回以上与えていました。それは、一人でやり抜かないといけない場面、自分の責任において物事にあたらないといけない場面が、将来きっとあると想定していたからです。

他者と協働することや協力することは、当然必要なことですし、不可欠なことです。しかし、自分が進みたい道に進む時、一人になることもあります。協働や協力という名の「依存」や「責任の所在の拡散」になっていては物事の成長は望めません。

周りの支援や協力を得ながらも、一人で最後までやり抜く経験をしておくことは、子どもの成長に必要なことのように思えます。

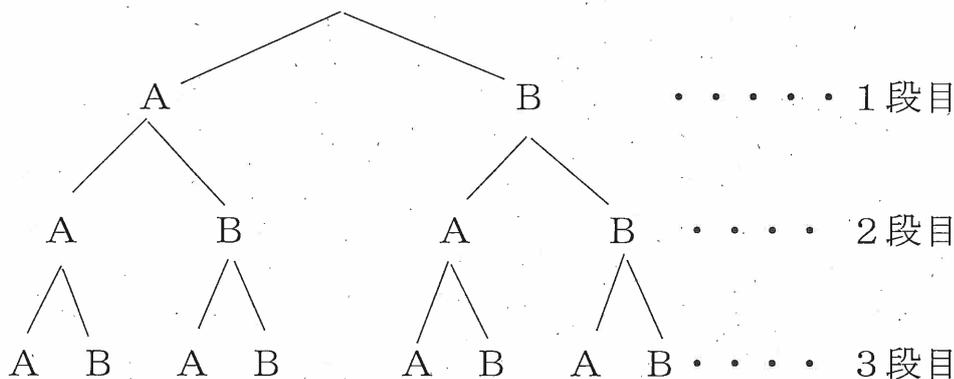
協働・協力する場面、一人でやり抜く場面、このどちらにも対応できる力は、子どもたちが成長した先の社会に求められる力になります。



分岐点

算数（数学）の問題です。「下図のようにAとBを書き込んでいき、その組み合わせを数えると、5段目では何通りの組み合わせができますか」

【図】



答えは1段目が2通り、2段目で4通り、3段目で8通り...となっているので2のX乗で求められます。つまり2の5乗（ $2 \times 2 \times 2 \times 2 \times 2$ ）で32通りの組み合わせです。この調子でいくと、10段目ではなんと1024通りの組み合わせとなります。

私たちは誕生してから数々の分岐点で選択をして今に至っています。それは、人生における大きな選択から、右か左か、YESかNOかといった日常的なものも含めて無数にあります。

子どもたちも同様でしょう。授業をどのように受けるか、宿題をしてるかしてないか、仲間とどのように過ごすのか等々。選択肢は2択ばかりではないでしょう。しかし、どの選択肢を選んでも選んだ分岐点には戻れません。選んだ結末がどのようになるかは分かりませんが、選択した先の今にたどり着きます。そして、また次の分岐点が訪れます。

子どもたちが分岐点でよりよい結末にたどり着ける判断ができるよう、先に多くの分岐を経験してきた大人として、子どもがよりよい判断ができる力を養わせたいものです



公と私

「家を一步出たら、家のルールは通用しません」。学級担任時代に受け持った子たちに言っていたことです。

各家庭には各家庭でのルールがあるかと思います。それは、家庭内で円滑に過ごすためのルールです。例えば、門限何時とかお小遣いいくらとかで、よく「よそはよそ、うちのうち」と言われることです。中には子育ての方針（好きなことだけさせる、子どもの言うことは全肯定する）というものも家庭のルールの範疇に入るかもしれません。

しかし、それらは家の中だけでしか効力を発揮しないことです。家の外は法やマナー、各場所での規則など家の中とは異なる社会のルールに満ち溢れています。

例えば、自分の都合で店舗の営業時間を変えることはできません。用があるならその店舗の営業時間に合わせないといけません。どんなに急いでいてもスピード違反は検挙の対象で、「急いでいたから」は通用しません。

学校の子どもたちの生活を見ていると、時々「それは、社会のルールとしてどうなの」と思われる場面を見聞きすることがあります。

- ・給食の好き嫌い（家でこれは食べたことがないから食べない）
- ・不可解な欠席（昨日試合があつて疲れているので休みたい）
- ・授業中の注意散漫（遅くまで出かけていて、遊んでいてきついで）

などなど

一足早く社会生活を営んでいる私たちですが、身の回りに好き嫌いで仕事を選ぶ、勝手な理由で仕事を休む、仕事中にボーっとしている人がいたらどうでしょうか。子どもたちが学校で学ぶことの一つに「社会性」があります。それは、将来の子どもたち自身にフィードバックされることだと思います。

あおなみ-Blue Wave-

学校ホームページはこちらから→



「も」 or 「しか」

夏休みが半分過ぎたころ、子どもたちは夏休み「あと半分もある」と感じるでしょうか、それとも「あと半分しかない」と感じるでしょうか。と同時に、夏休みの宿題を半分終わらせているとして「あと半分もある」と「あと半分しかない」のどちらでしょうか。おそらく置かれている状況で感じ方は変わるのだと思います。

では、小学校に入学して中学校を卒業する義務教育学校期間の9年間は「9年間もある」でしょうか「9年間しかない」でしょうか。

この9年間で少し細かい数値にしてみます。

9年間で日数にすると、 $365 \text{日} \times 9 = 3285 \text{日}$ ですが、うるう年が2回あるので2日を加算して3287日です。ですが、実際に学校に登校するのは年間200日足らずなので約200日 $\times 9$ で約1800日です。

これを時間に換算します。 $24 \text{時間} \times \text{約} 1800 = \text{約} 43200 \text{時間}$ ですが、実際に学校にいる時間は1日約8時間なので約8時間 $\times \text{約} 1800 = \text{約} 14400 \text{時間}$ となります。

約14400時間を日数換算します。約14400時間 $\div 24 = \text{約} 600 \text{日}$ となります。つまり、義務教育期間中に学校で過ごす時間だけを凝縮すると、約600日(1年と235日)という数値が算出できます。

日々の生活では3287日ですが、実際にはその5分の1(20%)以下が義務教育期間で費やす時間です。

さて、義務教育期間の9年間、「9年間も」でしょうか？「9年間しか」でしょうか？



「成果と報酬」

「〇〇したら、欲しいものを買ってあげる」「これができたら、好きな所に連れていく」など、子どもに対していわゆる『ご褒美』をあげることが往々にしてあるかと思えます。この「成果」と「報酬」について次のような研究結果が出ているそうです。

まず、報酬には「外発的動機付け」と「内発的動機付け」があり、前者はお金や物、サービスといった外部からの刺激で、後者は「達成感」や「好奇心」といった自分自身の内から湧き出るものということです。

そして「外発的動機付け」より「内発的動機付け」の方が**成果としての持続性が高い**ということです。

つまり、「〇〇したら、欲しいものを買ってあげる」というようなことは、瞬間的な成果はあるかもしれませんが、**次々と「外からの報酬」を欲するようになり、それがなくなると、成果を出そうとする意欲も低下する**ということだと思います。

子どもたちは成長過程で、様々な壁に突き当たります。その時、子どもを発奮させようと「外からの報酬」を与えることがあるかと思えます。しかし、これが常態化すると、先に述べたような「外からの報酬」**ありきに陥る懸念**があります。

「この壁を越えたら、ご褒美」より「この壁を超えることは、何かを得るためではなく、自分に必要な力をつけるため」であることを教え続けることが、将来的に子どもが社会を築いていく力になっていくのではないかと思います。



今年度最終月

令和7年度も3月を迎えました。1～5年生は3月24日の修了式まであと16回、6年生は3月17日の卒業式まで12回の登校日数となりました。教員という仕事柄か12月より3月の方が1年の終わりを迎えるという感じが強くします。

さて、子どもたちは身体的な成長もありますが、小長井小学校の学校生活においては「こ（とば）・な（かま）・が（んぼり）・い（きいき）」をもとにした内面的な成長を目指して、学習や行事等に取り組んできました。

子どもたちの成長が右肩上がりであれば、それにこしたことはありません。しかし成長過程で、時には壁にあたったり、紆余曲折したり、足踏みしたりすることもあります。それでも少しずつ伸びが見られるよう様々な手立てを講じます。

これらは、すぐに成果が表れるものから、時間を経て徐々に浸透していくものまで様々です。しかし、成長過程において、その時期に応じた学習や体験を積んでいくことが適切なのかとも思います。

この時期、学校として、学年として、子どもたち自身として、今年度の何が成果で、何が課題であり、次年度にその成果をいかに伸ばし、課題をいかにクリアにしていくかの手立てを考えていくことの大切さを毎年感じています。

今年度を省みると、「こ・な・が・い」を機会あるごとに子どもたちに意識づけてきましたが、次年度は「ことば」の部分に焦点化した取組を展開する必要性を感じているところです。

読む・書く・話す・聞く・語彙・場に応じた話し方等々、学力にも生活にも基本となる重要な要素です。